

高齢者福祉施設における福祉機器の活用を踏まえた課題 その1
浴室空間における実態と課題

正会員 ○毛利 志保 *
同 加藤 彰一 **

高齢者福祉施設 従来型 ユニット型
福祉機器 介護職員

1. はじめに

高齢者福祉施設における介護職員の確保が困難であるといわれて久しい。人材の不足は介護施設の運営に支障をきたし、離職率の高さは介護技術の継承を妨げ、介護の質の保持が困難となる。こうした状況から、介護職員の負担要因の一つである身体的負担の軽減に資するべく、福祉機器を活用する取り組みが始まっている。

今後は介護職員自身の高齢化が進むなか、ますます福祉機器の活用が求められると考えられるが、その際の施設計画の変化や、求められる空間要件について明らかにしていく必要がある。

本稿では、介護職員の負担と浴室空間における福祉機器の活用実態について、運営形態（従来型・ユニット型）別にみた傾向と課題について明らかにする。

2. 福祉機器とは

本稿で扱う福祉機器の対象は、主に「福祉用具」と呼ばれる^{*1,2}車椅子のように本人の身体機能を補う機器類と、リフトのように建築物に設置するため設計上様々な配慮を必要とする機器類とする。双方を本稿における「福祉機器」と定義する。

3. 調査概要

M県内における高齢者福祉施設を対象とし、アンケート調査および施設平面図の収集を行った。調査概要を表1に示す。施設に郵送し、管理者に回答を依頼した。一部の設問については、施設内の介護職員の総意を尋ねた。

また、対象施設における運営形態の割合について図1に示す。M県における従来型・ユニット型（併設型）の施設数割合は、全国に比して元来ユニット型が多い傾向があるが、更に回答施設においてはユニット型の割合が高い結果となり過半数を占めた。

4. 調査結果

1) 職員の身体的負担と介助業務

介護職員の腰痛割合を表2に示す。35%の職員が腰痛を訴え、運営形態別では、従来型（45%）がユニット型（28%）を大幅に上回った。要介護度は同程度であるが、ユニット型では若年層が多いと推察される職員の年齢や空間に要因があると推察される。また、腰痛の原因となる介助業務について職員別にみると（表3）、最も多いのが「入浴支援」であり、移乗支援、体位変換と続いた。

2) 入浴支援における整備状況

入浴支援は、業務中の時間割合が最も高く、負担感も高い。更に、設備に最もコストがかかることか

表1 調査概要

調査方法	アンケート調査 平面図収集
調査日時	2014年12月15日～2015年1月9日
調査対象	M県下の高齢者福祉施設 149施設
回答施設	アンケート:38施設(回答率26%)
設問内容	施設概要 離職の状況について 職員の身体的負担 入浴支援、排泄介助、移乗支援 における福祉機器の活用状況

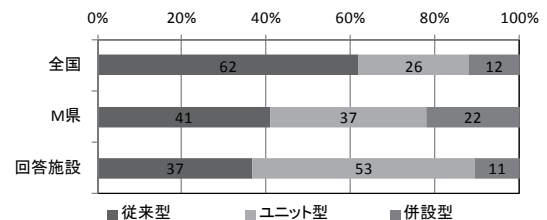


図1 全国、M県、回答施設における運営形態別の割合

表2 腰痛の割合

運営形態(職員数)	割合(%)
全体(n=935名)	35.6
従来型(n=452)	45.1
ユニット型(n=401)	27.7
併設型(n=82)	22.0

表3 腰痛の要因となる介助(複数回答)

介助種別	割合(%)
体位変換	22.9
移乗支援	30.3
入浴支援	31.7
身の回りの支度	20.3
その他	23.0

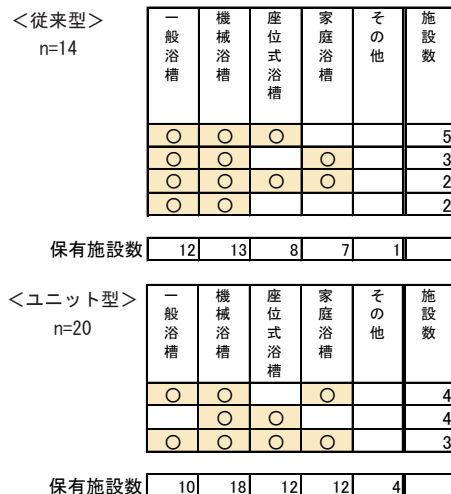


図2 運営形態別にみた主な浴槽の組み合わせ

ら、浴室の整備に着目する。

運営形態別にみた主な浴槽の組み合わせを図2に示す。従来型では「一般（浴槽）」「機械（浴槽）」はほぼ整備されており、それらに「座位式（浴槽）」又は「家庭（浴槽）」を組みあわせ対応している。ユニット型においては、その運営特性上、原則「家庭」の整備が推察されたが、実際は6割程度にとどまり、「機械」「座位式」で対応する施設も見られた。

次に、福祉機器の利用状況について浴槽別の福祉機器の使用施設数を示す（表4）。浴槽別に5割以上の施設に用いられている福祉機器に着目すると、全浴槽を通して「車いす（シャワー）」「滑り止めマット」「シャワーいす」の3種にとどまった。いずれも簡易なものである。各種リフトについては、固定式リフトが用いられる傾向にあるものの、採用率は1～2割程度であった。

浴槽別の福祉機器の主な組合せをみると（表5・複数施設で回答があったもの）、表4同様、簡易なもの同士を組合せる傾向とともに「一般」と「家庭」、「機械」と「座位式」において、類似傾向が見られた。

また、運営形態別の典型的組合せでは（表6）、どの浴槽の場合でも、従来型よりユニット型で用いられる福祉機器の数が多く、大がかりな傾向にあった。浴室面積は同程度と考えると、ユニット型では設計時の配慮ができたこと、一人での介助を前提としたシフト上の理由があったと考えられる。

3) 運営形態別にみた浴室の評価

図3に浴室の評価を示す。概ね従来型よりもユニット型の評価が高かった。従来型では、浴室面積の評価は高いものの浴槽や機器の配置に課題をもつ施設が多かった。ユニット型では、収納空間の狭さに課題があるが、介護の流れに合致しているとの評価が多くみられた。また、改善できない理由としては（図4）、従来型・ユニット型ともにコスト不足を挙げたが、従来型では空間の狭さも課題となった。

5. まとめ

職員の身体的負担感は大いものの、運営方法に合致した浴槽や福祉機器の活用は、未だ浸透していない実態が把握された。運営形態別にみると、特にユニット型にニーズが高く、単独での入浴介護との関連が推察された。

今後は、長期的な利用を想定し、メンテナンス性に優れた耐久性の高い製品を予算化し採用する必要があると思われる。空間的には、福祉機器の組合せの典型例を取り上げ、職員の動きなど、使われ方の把握から、計画に還元したい。

謝辞

本研究は、平成26～28年度文部科学省科学研究・基盤研究（C）「職員の負担軽減と入居者の活力ある生活を両立する高齢者施設の計画」（研究代表：毛利志保）の助成を受けて行われたものである。また、アンケートに回答くださった施設には記して感謝申し上げます。

註
1) 福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律（2005）, <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H05/H05HO038.html>
2) 公益財団法人テクノエイド協会 福祉用具の分類コード, <http://www.techno-aids.or.jp/howto/db-select.shtml>

* 三重大学大学院工学研究科 助教・博士（工学）
** 三重大学大学院工学研究科 教授・博士（工学）

表4 浴槽別にみた福祉機器の利用状況（施設数/複数回答）

	杖	歩行器	車いす（通常）	車いす（シャワー）	天井走行式リフト	固定式リフト	その他リフト	入浴台	バスポート	滑り止めマット	シャワーいす	その他	無回答	使用施設数計
一般浴槽	2	1	4	12	-	3	-	8	-	6	15	-	8	26
機械入浴装置	1	-	5	7	1	3	1	6	-	3	2	5	7	35
座位式入浴装置	1	1	6	13	-	6	-	1	2	8	7	-	11	22
家庭浴槽	-	-	1	8	-	2	-	6	3	12	13	1	13	20
その他	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	29	5

表5 浴槽別にみた福祉機器の主な組合せ

	杖	歩行器	車いす（通常）	車いす（シャワー）	天井走行式リフト	固定式リフト	その他リフト	入浴台	バスポート	滑り止めマット	シャワーいす	その他	使用施設数計
一般浴槽				○				○		○	○		6
				○						○	○		2
											○		2
家庭浴槽				○						○	○		4
				○						○	○		2
				○				○		○	○		2
機械浴槽				○				○					4
				○									3
				○						○			3
						○						○	3
座位式浴槽				○									6
				○							○		2
				○									2
				○									2

表6 運営形態別にみた主な福祉機器の組合せ

	杖	歩行器	車いす（通常）	車いす（シャワー）	天井走行式リフト	固定式リフト	その他リフト	入浴台	バスポート	滑り止めマット	シャワーいす
一般浴槽	従	ユ		○							○
機械浴槽	従	ユ		○		○		○			○
座位式浴槽	従	ユ		○		○					
家庭浴槽	従	ユ		○				○		○	○

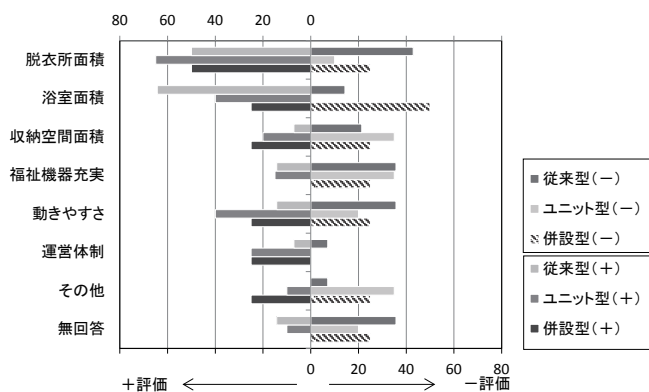


図3 運営形態別にみた浴室の評価

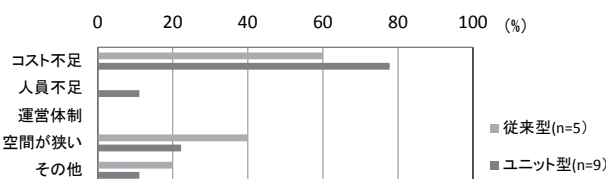


図4 運営形態別にみた実現できない理由

* Assistant Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.
** Prof., Graduate School of Eng., Mie Univ., Dr. Eng.